

東海地域の言語実態調査 (2)

愛知県尾張地域と三河地域のちがいを中心に

吉田健二 阿部柊斗 安藤梨紗 大城日向子 大西彩織 岡田萌
奥村亮太 小栗菜野子 尾迫成美 加藤燦湖 小野田みさ
黒野みなみ 竹内博紀 竹門英恵 田中和季 都築阿弥 中野多恵
松川芽衣 水野友裕 安井望恵

1. 本稿の目的

愛知淑徳大学文学部国文学科「国語学演習」では、2014年度より毎年「学外教育活動」として言語調査を実施しているが、2018年度より、同一の項目による継続的な調査研究を開始し、吉田健二・他(2019)で第一次報告をおこなった。本稿では、継続して2019年8～9月に愛知県の11町村でおこなった調査の結果を中心に報告する。表題は「東海地域」としているが、上記前稿(p.207)でのべたとおり、調査を計画しているのは岐阜県美濃地方・愛知県全県・三重県北中部である。すべての調査を終了したうえで得られた情報を総括して報告すべきだが、ここまでの調査によってうかがわれた傾向を整理し、今後の調査・分析の指針を見出すため、昨年度の第一次計画からの変更点や、今回の調査であらたにみいだされた傾向などをのべる。

2. 調査概要

今回の調査でお会いした話者は表1の32名である。調査地は愛知県の尾張地方から三河地方にかけての言語使用・意識の変化の様相を検討できるようにという意図でえらんだ。半田市調査でお会いしたうちお一人が隣接する知多郡東浦町出身の方だったので、全体で11市町となった。

「略称」欄にあるように、犬山70、犬山40のように市町名と年代(調査時点)をくみあわせた略称によって各話者をよぶ。話者の年齢は2019年の時点で23歳(江南20-2)から89歳(阿久比80)。江南市と知多郡阿久比町で複数の同年代の方にお会いしたので、年齢がたかい順に江南20-1, 江南20-2, 阿久比70-1,

阿久比 70-2,... のようによぶ。

表 1 話者の一覧

	略称	生育地	男女	生年	他地居住歴
1	犬山 70	愛知県犬山市	男	1948	
2	犬山 40	愛知県犬山市	男	1972	27-34 歳・丹羽郡扶桑町
3	江南 60	愛知県江南市	男	1954	27以降・丹羽郡扶桑町
4	江南 20-1	愛知県江南市	男	1991	
5	江南 20-2	愛知県江南市	男	1996	
6	清須 50	愛知県清須市	女	1965	29-36 歳・愛知県稲沢市
7	清須 40	愛知県清須市	女	1972	
8	清須 20	愛知県清須市	女	1996	
9	東海 40	愛知県東海市	女	1974	
10	東海 30	愛知県東海市	男	1988	27 歳・東京、28- 現在・名古屋市
11	東海 20	愛知県東海市	男	1992	
12	知多 50	愛知県知多市	男	1968	23-25 歳・長野市
13	知多 40	愛知県知多市	男	1974	27-28 歳・東海市
14	知多 30	愛知県知多市	男	1985	18-23 歳・富山市
15	知多 20	愛知県知多市	女	1991	
16	東浦 80	愛知県知多郡東浦町	男	1934	33-35 歳・知多郡南知多町（日間賀島）
17	阿久比 80	愛知県知多郡阿久比町	男	1929	
18	阿久比 70-1	愛知県知多郡阿久比町	男	1940	愛知県知立市
19	阿久比 70-2	北海道小樽市	女	1942	23 歳～現在・阿久比町
20	阿久比 70-3	愛知県知多郡阿久比町	男	1944	
21	阿久比 70-4	愛知県知多郡阿久比町	男	1945	
22	半田 80	愛知県半田市	男	1934	
23	知立 60	愛知県知立市	男	1955	
24	知立 50	愛知県知立市	女	1969	23 ～ 25 歳・愛知県岡崎市
25	知立 20	愛知県知立市	女	1991	
26	幸田 70	愛知県額田郡幸田町	男	1946	
27	幸田 40	愛知県額田郡幸田町	男	1976	18-22 歳・東京
28	幸田 30	愛知県額田郡幸田町	男	1985	
29	蒲郡 60	愛知県蒲郡市	男	1958	
30	蒲郡 50	愛知県蒲郡市	女	1969	20-30 歳・名古屋市
31	蒲郡 30	愛知県蒲郡市	男	1983	26 歳～現在・豊川市

調査にあたって、各市町の教育委員会・社会教育課などに話者の紹介・調査日程や場所の確保などのお世話をいただいた。それら団体の職員が話者をつとめてくださったケースがおおく、犬山 70, 犬山 40, 東浦 80, 半田 80, 阿久比の全員, 幸田 70 の 10 名をのぞく 22 名がこれにあたる。「他地居住歴」欄にしめしたとおり、下のお一方をのぞき、生育地以外ですごしたのは大学期以降にかぎられており、それぞれの調査地のことばを代表するかたがたとみなしてよいとおもわれる。

阿久比町のお一人は、話者コーディネーターとして参加してくださったが言語形成期を北海道小樽市ですごした方で、阿久比町のことばを代表しない。同席し、音声項目をのぞくすべての調査項目におこたえくださったので、仮に阿久比 70-2 とよび、参考として報告する。これをのぞいて、『方言文法全国地図』の「その地域をはなれていた期間が 10 年以内」という基準をみたさないのは蒲郡 50 がちょうど 10 年間、同県内の名古屋市に住んだケースのみ。調査は筆者たち 20 名が実施し、吉田は 10 地点すべて、その他は各人 2 箇所の調査に参加した。調査は現地の会議室などで実施した。一人 1 時間ほどの内容だが、進行によっては完了できないことがあった。これを想定して、調査票を前半・後半に分け、後半に話者が自身で記入可能な項目を置き、終了しなかった部分を記入して後日郵送していただくようお願いをした。この「部分的留め置き」方式をとることになったのは 5 人で、回収率は 100% だった。ご厚誼に感謝したい。

3. 先行研究の略称

本稿でたびたび言及する先行研究について、以下の略称をもちいる。

(文献)	(略称)
『日本言語地図』(国立国語研究所 1966~1974)	LAJ
『東海道グロットグラム調査』(井上史雄 1992)	『東海道』
『近畿言語地図』(岸江信介・他 2017)	『近畿』
『岐阜県方言辞典』(山田敏弘 2017)	『岐阜県』
『新・日本言語地図』(大西拓一郎・他 2016)	NLJ

4. 調査項目

昨年度調査から、調査項目を固定し、名古屋都市圏すべてで継続的な調査をおこなうことを計画した。今年度の調査もその方針にしたがい昨年度とおなじ項目を調査したが、以下の項目を追加した。すべて、いわゆる語彙項目である。

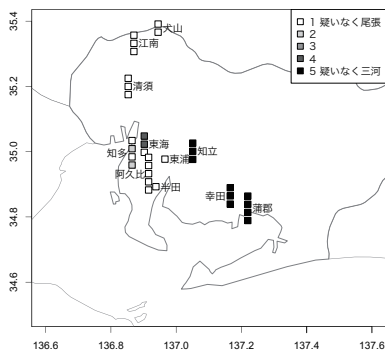
(1) 2019 年度調査より追加した項目

「ただいま」(家に帰ったことを家人にしらせるときの発話)、「ごちそうさま」(食事を終えたときの発話)、(小学校の)通学グループ、「連れ」の意味

5. 結果 (1) 言語意識項目

5.1. 地域への帰属意識：尾張か三河か

本年度は調査に参加した学生（吉田をのぞく筆者）の提案により、愛知県尾張地方と三河地方にまたがる調査を企画した。これにもとづき調査のお願いをした結果、愛知県尾張地方の北端の犬山市から、知多半島の起点周辺の知多市・半田市などを経て、東三河地方の蒲郡市にいたる市町を調査することができた (Map1 を参照)。そこで、これまでとおなじ言語意識項目にくわえて、「お住いの地域は「尾張」「三河」のどちらだと思っていますか」という質問に「疑いなく尾張 = 1」から「疑いなく三河 = 5」の5段階でこたえていただいた。結果を Map1 にしめす。



Map 1：この地域は尾張か三河か

各市町に複数の話者がいるので、それぞれの年齢順に上からならべた。凡例

にしめすとおり、疑いなく尾張（＝１）から疑いなく三河（＝５）まで白黒の濃淡で表示したが、中間をえらんだ話者はすくなく、地域の帰属意識は明瞭なようである。愛知県 Web ページの「県内の市町村」によれば、Map1 で東浦の東に位置する刈谷市からが三河とされる。知立～蒲郡の話者の判断は完全にこれに合致している。いっぽう、尾張でも知多地域の東海 40、東海 30 に「疑いなく三河（５）」、また知多 40、知多 20 に「尾張だがちょっと三河（２）」という判断があるのが注目される。これらの話者について、表 1 に載せた他地居住歴からは、三河地方との関連は見出されない。地域でくらす人びとの地域帰属意識が、旧国名にもとづいて行政が使用する地域区分とはいくぶんずれている可能性を示唆する。個人の経験やネットワークの影響もかんがえられるので、今後の調査をまって判断する必要があるが、とくに知多半島地域の話者については、地域への帰属意識と、尾張・三河のいずれの方言の特徴があらわれやすいかとの関連を検討することもかんがえられる。（都築・中野）

5.2. 聞き手による方言使用の変化 / グロットグラムの構成

「地元のことばが好きか」「どのていど標準語にちかいかな」などの言語意識調査は 2016 年度から実施している。県によるちがいがみられ、報告してきたが(吉田・他 2017:237-239; 吉田・他 2018:170-173)、今回は調査地が愛知県のみであるためか、顕著な地域差・年齢差がみとめられなかった。ここでは、「地元出身の友人と話すとき」と「他地域出身の友人と話すとき」の方言使用の程度の変化の地理×年齢による分布をグロットグラムによってみる（図 1）。

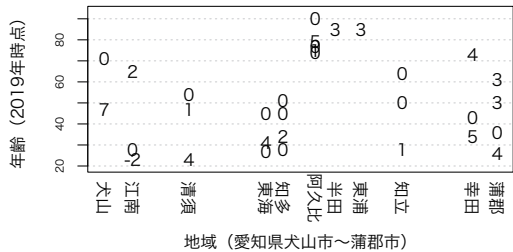


図 1 地元方言の使用度（対地元の友人・対他地域の友人の差）

グロットグラムの構成をのべる。縦軸の年齢は生年によって算出した2019年時点の年齢（月日は考慮していない）。今回の調査地は主要国道や鉄道路線などの経路上にならんでいない。そこで、各市町の役所の所在地の直線距離を測定し、(Casiokelsanの「地図をなぞって距離を計算」サイトの機能を利用)北端の犬山から概略南へすすんで半田にいたり、そこから東へすすみ東浦から東南へすすんで蒲郡にいたるルートを仮想し、各都市をそれに沿った直線上にならべた。具体的な位置はMap1を参照されたい。話者には市町内における生育地の位置も教えていただいたが、これによって配置を調整するのは煩雑かつ不正確になるので断念した。地元方言の使用度を「1 = 全くつかわない」～「9 = とてもよくつかう」の数値でたずねたので、「地元の友人」の値から「他地域の友人」の値を減じた値を数字でしめす。

他地域の友人に対しても方言使用をまったく控えない人(0)から方言使用をおおしく抑える人(7 = 犬山40)までさまざまな話者がいるが、明確な地域差も年齢差もみられない。なお、他地域の友人により方言を使う(-2)というケースがあったが、データ取得時のミスだとももわれる。(都築・中野)

6. 結果(2) 語彙項目

6.1 地域差がみられた項目

6.1.1 持ち上げて運ぶ

昨年度につづき、机などを持ち上げて運ぶ意味の動詞をしらべた。結果は図2のとおり。また、昨年度の調査地域のツルとおなじく、若い世代にも方言的語彙が健在である。東海市までズルが優勢で、それより北はツルのみとなる。犬山70 ははじめに「運ぶ・持ち運ぶ」をこたえ、誘導質問にたいして「ツル」をつかうとこたえた。グロットグラムでは左から順にならべてある。『岐阜県』457図は常滑～阿久比～東浦以南の知多半島地域や三河の東栄町にズル、名古屋市、愛西市、稲沢市にツルを載せる。今回の結果はこれと矛盾しない。昨年の調査で岐阜南端～愛知尾張北部～三重四日市まで全域でツルだった(吉田・他2019:197) ことともあわせると、名古屋から東海市のどこかで両形がいれかわると思われる。幸田70のユズルはズルとの関連を予想してちかい記号をあ

たえた。今後の調査で分布をあきらかにすることで、両者の関係についててがかりがえられることを期待したい。(安藤・阿部)

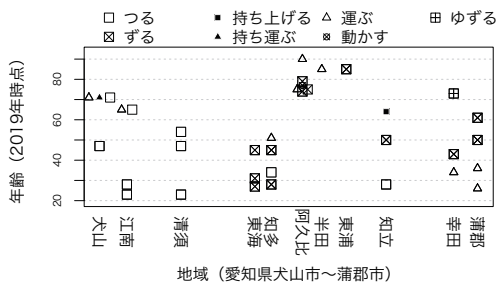


図 2 持ち上げて運ぶ

6.1.2 朝礼台・指令台

「小学校の運動場にある、運動会や朝礼で先生などが乗って指示を出す台」の呼称を、写真を提示してたずねた。一般的には「朝礼台」と呼ばれ、販売する企業も商品名を「朝礼台」としている（つくし工房：https://www.tukusi.co.jp/commodity/list/119.html）。各種方言辞典に記載はなく、現時点で先行研究の記載もみつけない。今年度の調査結果を図3にしめす。ふたつの回答がえられたばあい、第一回答を左に、台に回答を右にしめしたが、江南 20-2、清瀬 40、知多 50 の第二回答は誘導によるので、記号をグレーにしてある。「朝礼台」が全域的に分布するが、清瀬までは「指令台」も有力である。本グループの過去の調査でも指令台が名古屋を中心とした尾張地方北部に分布しているようすがうかがえたが（吉田・他 2016:244-245）、これと整合する地理的分布をしめした。前項の「ツル・ズル」とおなじく、両者がいれかわるのが清瀬市と東海市とのあいだであることも注目される。（松川・水野）

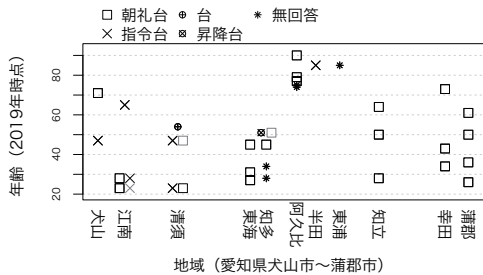


図 3 朝礼台・指令台

6.1.3 くすぐったい

「ワキの下をくすぐられたとき」の「くすぐったい」の結果を図4にします。どの世代も標準語形クスグッタイが有力だが、前半部分はコソ（●○⊕）、コシヨ（+×⊗）、コチヨ（△）の3種があった。コソ系は半田までで優勢。LAJ32図、『岐阜県』178図ではさらに東まで分布するが、それらの資料の世代からコソ系が後退したことをしめすかどうかは今後の結果をまって判断する必要がある。コシヨ系はLAJ、『岐阜県』では東海になく、当該地域ではあたらしい形式だと思われる。今回の話者では60歳以下のわかい世代におおく、20歳代にもみられる。LAJや『近畿』26図によると近県では近畿周辺部に分布するが、この影響がかんがえられるかどうかは現時点では不明である。コチヨ系はLAJでは北陸～東北に分布し、東海にはない。1名のみ（阿久比70-4）で、これも今後の結果をまつことになる。

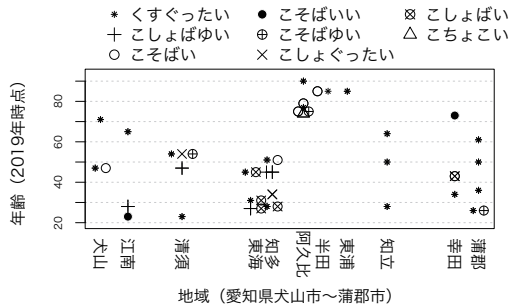


図4 くすぐったい

後半部分は標準形のグッタイ（*×）以外に、バイ（○⊗）、バイイ（●）、バユイ（+⊕）、コイ（△）があった。LAJ33図では当該地域の西（北）はバイイで、近畿のバイと対立するが（『岐阜県』でも岐阜でバイイ、バエエという長音形が圧倒する）、今回の話者からはバイ類がすくなくみられた。バユイはLAJで滋賀・岐阜の6地点のみにみられた形式だが、今回の話者では8人にみられた。LAJで愛知県弥富に1地点のみみられるバヤイとの関連が考えられる。いっぽう、LAJ、『岐阜県』では当該地域で圧倒的だったベタイが皆無だった。前半部・後半部を総合すると、先行研究で当該地域にみられなかった

コショとバイをくみあわせたコショバイが東海、知多の若い世代にみられることが注目される。コショバユイとあわせ、従来の方言形式に若干の変更が加えられた新形式が若い世代で有力な様子がかがわれ、方言形が一定の勢力を維持していることを示唆する。(加藤・黒野)

6.2 世代差がみられた項目

6.2.1 「肉」の意味

「肉」と聞いて「豚・牛・鶏」のいずれを思い浮かべるかをたずねた。結果は図5のとおり。最高齢世代で「鶏」が優勢なのは昨年度と同様で(吉田・他2019:200)、NLJ21図とも整合する(図6参照)。2018年度調査の「岐南～稲沢」は今回の調査地の西に位置するが、60歳以下では「牛」が圧倒していた。今回の「犬山～知多」では上の世代が「豚」、下が「牛」と世代差らしい傾向がみられる。比較のため、NLJ21図の原資料であるFPJD調査データ(国立国語研究所2018)をもちいて作成した、東海地方とその近隣の「肉の意味」の地図をMap2にしめす。複数回答は第一回答から左～右にならべてある。愛知県は「鶏」が優勢で、名古屋市、豊田市に「豚」がみられ、西端の佐織町のみ、隣接する近畿に連続して「牛」である。今回の結果とあわせると、FPJDの話者(2019年度で中央値84歳)の「鶏～豚」から「豚」が優勢になり、さらに若い世代には近畿から「牛」が侵入、という変化がかがわれる。昨年(2018)の稲沢70と同様に知立60から、「小さい頃、口に入るのは鶏だけだった」という情報提供を得ており、食生活の変容が背景にあるとかがえられる。(奥村・小栗)

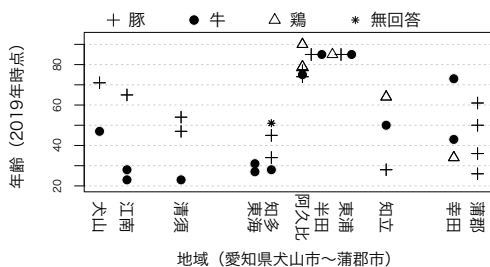
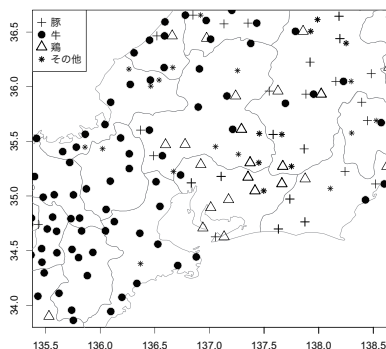


図5「肉」の意味



Map 2: 「肉」の意味 (FPJD)

6.2.2 あざ

LAJ80 図とおなじ質問により調査をおこなっている。結果は図6のとおり。LAJで尾張でクロジニナル、知多～三河でクロジ、チシンダが分布するが、今回の調査ではLAJで概略関東～山形のみで勢力があったアザ(*)がすくなくない。吉田・南波(2019:91)でみた若年世代方言の全国的傾向と整合する。クロ系(●▲■+×)が第一回答だったのは江南60と半田80のみ、併用をふくめてもっとも若いのが犬山40で、これ以下の年代はアオ系(□△⊗)が多かった。三井(1999:92)で指摘された「クロ～」から「アオ～」への変化の進行が確認できる。いっぽう、犬山・江南のクロニエルは、若い世代でもまだクロ系の勢力がつよい岐阜(吉田・南波 2019:91)とのちかさに関係すると推測される。(大西・岡田)

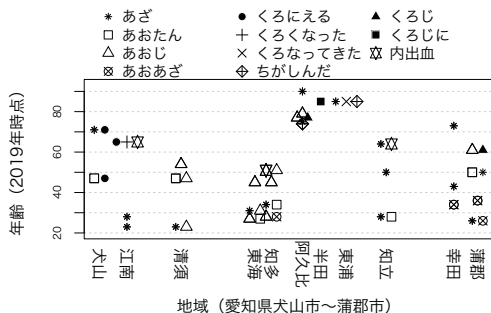


図6 あざ

6.2.3 ドロボーケズリ

『東海道』で、関東・関西から東海地域の方言を区別する項目のひとつに「ドロボーケズリ」がある。井上（1989:118）の指摘がはやく、井上・遣水（2002:161）は「愛知県・岐阜県付近の若い世代の新方言」で新潟県での使用も報告する。篠崎（1997:85）は「列島の中央部を中心に…東は関東から南東北まで」分布するとする。初期の調査から30年近くを経た現在の状況を検討するため調査項目にくわえている。今回の結果は図7のとおり。地域差ではなく世代差がみとめられ、70歳代以上で「いわない（聞かない）」が、30～60歳代で「いう」がおい。そしてふたたび、もっともわかい20歳代で「きくことがある」「いわない（聞かない）」が優勢となる。30年前の若い世代は現在の中年層であり、現在もこの語形をつかう（記憶する）が、現在の若い世代の使用は衰えており、一世代の「流行語」的なものとして今後消失する可能性がかんがえられる。（尾迫・田中）

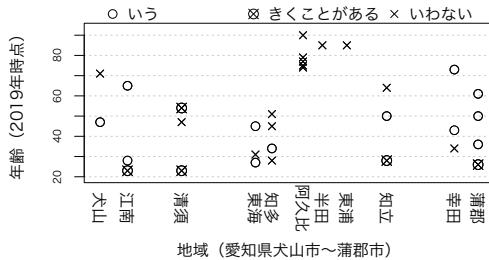


図7 ドロボーケズリ

6.3 世代差・地域差ともにみられない（はっきりしない）項目

6.3.1 「連れ」の意味

「あの喫茶店にはよく私の連れと行く」というときの「連れ」が誰をさすかを、「配偶者」「友人」「その他」の選択肢をしめしてたずねた。結果は図8のとおり、「友人」が圧倒する。国語辞典には「同伴者」等と記述されており、配偶者（等）、友人のいずれをも意味しうが、この語を文脈なしに与えられたばあいには思い浮かべる人物には方言差があることが指摘されている。西日本で「友人」をさす傾向があるようだが、今回の結果は、東海地域もこの傾向がつよいことを示唆する。吉田をのぞく筆者19人の理解は両方の意味で割れており、今回の話

者のうち若い人にも「友人」という回答がある。今後の調査により世代差などが見出される可能性もかんがえられる。(小野田・竹門)

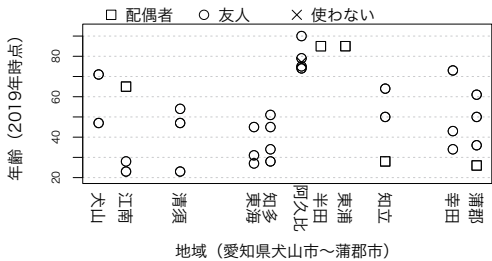


図 8「連れ」の意味

6.3.2 通学グループ

「学校方言」的な項目として、6.1.2 節の「朝礼台」にくわえて、「小学校で、家が近い生徒でグループを作って登校・下校をするグループ」の調査を開始した。Wikipedia には「「通学班」「通学団」などと呼ばれる登下校集団」とあるが、一般の国語辞典には立項されていない (『日本国語大辞典第二版』『広辞苑第七版』『大辞泉第二版』『三省堂現代新国語辞典第六版』『学研現代新国語辞典改訂第五版』)。通用する規範がなく、小学校とかかわらない場面でもちいられることがすくないため、各学校、あるいは自治体レベルでまちまちの語が使用されていると思われる。たとえば岐阜県多治見市では「通学班」だが、となりの土岐市では「通学団」が一般との情報を得ており、筆者のうち数名からは「分団」も聞かれ、東海地域内で地域差・世代差がみられることが予想される。図 9 に結果をしめす。ここでも複数回答は回答された順に左から右におく。Google 検索によると「登校班」という地域もあるようだが、今回の調査では凡例にしめす 3 例のみがえられた。清須 40 は、「通学班」「分団」「通学団」の順にすべてをこたえた。複数回答はほかにもおおく、上記の 3 つのうち複数を耳にすることがめずらしくない、という状況が背景にあるのかもしれない。調査地のうち北寄りの地域 (犬山～清須と知立) で「通学班」ががよく、南寄りの地域 (上記以外) で「通学団」がよくなる傾向がうかがえるが、明瞭ではない。今後の調査結果をまって、傾向をあきらかにしたい。(吉田)

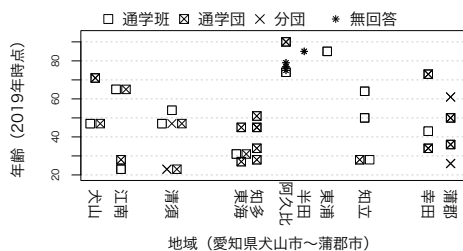


図9 小学校の通学グループ

7. 結果 (3) 文法項目

7.1 やさしい命令「～やー」「～りん」の使用度

文法項目のうち標題の項目の結果を報告する。2017年度から(2)の調査文をもちいて調査を継続している。図10・図11にこの3文のうちいくつで「～やー」「～りん」の形式を使用するとこたえたかをしめす。

(2) やさしい命令の調査文

- (親しい友人から食べ物すすめられて)「おいしいで、食べてみやあ／みりん」
- (親や目上の人から準備をせかされて)「はよ準備しやあ／しりん」
- (買い物中の親子の会話) 子「これってどこにあるかな」親「店員さんに、聞いてこやあ／こりん」

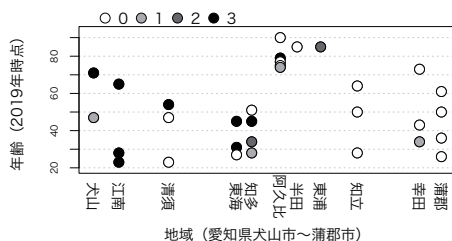


図10 やさしい命令「～やー」の使用度 (0～3)

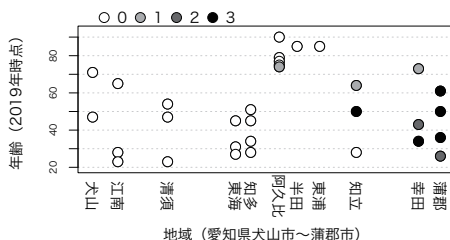


図11 やさしい命令「～りん」の使用度 (0～3)

両者にはかなり明瞭な地理的分布の対立が見出られた。尾張～知多地域までが「～やー」で、三河地域が「～りん」である。両形のまじわる知多地域では、阿久比 70-4 のように両者をもちいる話者もいるようである。尾張 vs. 三河という対立、知多半島地域の併用のいずれも、江端（1981:20）の報告と整合する。江端論文の話者は 1966-68 年調査の「老年層」「少年層」とのことで（p.19；生年など不明）、前者は今回の話者より上、後者は今回の高年齢層にあたると推測される。およそ 50 年を経て、両者の境界がおおきくはうごいていないこと、江端（1981:21）が指摘した「～りん」の「分布進出」は進行していないことがうかがえる。（大城・安井）

7.2 やさしい命令「～やー」「～りん」の印象

前節の調査につづいて、(2) のそれぞれの命令の発話の印象をたずねた。「きつい (1) ～きつくない (5)」「かわいい (1) ～かわいくない (5)」「都会的 (1) ～田舎っばい (5)」「丁寧 (1) ～くだけている (5)」の 4 種類の評価語対を提示し、5 段階評定を求めた。「～やー」「～りん」が使用される地域にいて、耳にする機会があるかどうかで評価がことなることを予想し、「尾張（犬山～東蒲）」「三河（知立～蒲郡）」に分けた。評定の平均値を図 12.13 にしめす。

「尾張」「三河」の話者グループによる明らかなちがいはみられない。右の二つ「都会的」「丁寧」の値が全体的にたかく、「りん」「やー」のいずれも「田舎っばい」「くだけた」表現という印象をもたれていることがわかる。「方言的表現形式だ」という認識のためだと思われる。いっぽう左の「きつい」「かわいい」については、調査文による印象のことがみられる。比較的顕著なのが「三河」グループの、「～りん」にたいする評価で、食べ物をすすめる (a)、子供に言い聞かせる (c) は、比較的「きつくなく」「かわいい」という印象になるのにたいして、準備を急かせる (b) はやや「きつく」「かわいくない」という印象になる傾向がある。「三河」グループに日常的にこの形式にふれる機会があることが、この形式にたいする「敏感さ」の背景にあるとおもわれる。同様の評価の変化は「尾張」グループの「やー」には見られない。それぞれの地域での「りん」「やー」の表現価値のちがいにともづくものかもしれない。（大城・安井）

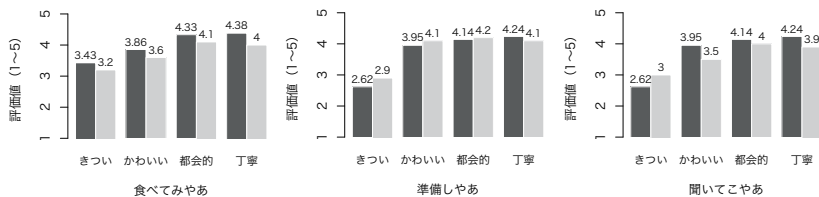


図 12「～や～」の印象評定の平均値（1～5）。

■ 尾張（犬山～東浦 N=21） ■ 三河（知立～蒲郡 N=10）。

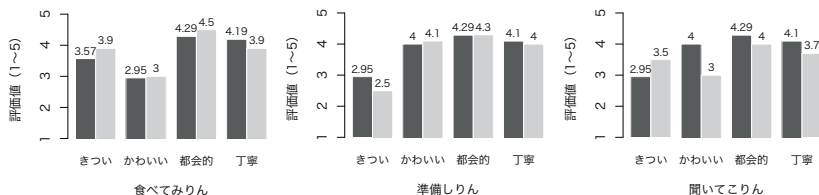


図 13「～りん」の印象評定の平均値（図 12 を参照）

8. 結果（4）音声項目：母音の無声化

本稿では母音の無声化についてのみ報告する。音声データが採取できた 27 名について、筆者たち（竹内・吉田）の聴覚印象と、音声波形・スペクトログラム上の母音をしめす定常波の存在を参照して、「無声化あり」「無声化なし（母音が存在する）」の二値に分類した。くわしくは吉田・他（2019:184-186）を参照。福森・池田（2004）の知見との比較が可能になるよう、昨年度の 8 語「基地、父、寄付、皮膚、月、土、菊、串」に、母音無声化の傾向が弱いとかんがえられる〔無声子音+母音+有声子音〕という条件をふくむ 4 語を追加した（記事、雉、日々、肘）が、無声化が 1 件もみられなかったので、昨年度とおなじ 8 語の 1 拍目、2 拍目の母音の無声化生起データを整理して報告する。

まず、図 14 に話者ごとの無声化率をしめす。調査語は 1,2 拍目とも無声化する可能性のある 2 拍語なので、2（拍）× 8（語）=16 ケース中の確率になる。無声化率 0～10% の話者が 5/27 名おり、10～20% の話者も 7 名いる。無声化率が 50% を超す話者も 3 人いるが、福森・池田（2004:56）の表 15 の話者たちと比べると、無声化が少ないようである。昨年度の 15 人（1～75%）とくらべても、無声化率がたかくなったとはいえない（下記参照）。図 14 内での明瞭な

地域差もみられない。愛知県東部にちかづくにつれ、無声化傾向がよくなることを予想したが、蒲郡までという今回の調査範囲では、そのような傾向はみとめられなかった。

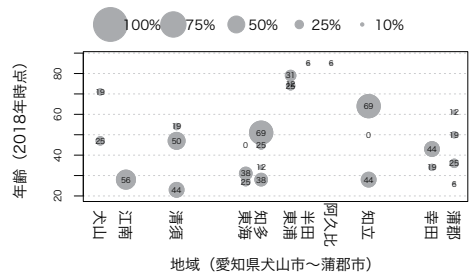


図 14 話者ごとの母音の無声化生起率（各 8 語 2 拍の 16 ケース内，単位は %）
無声化率をグレーの円●の大きさと数字でしめす

つぎに、語ごとの無声化率を図 15 にしめす。昨年の語ごとの無声化率（吉田・他 2019:183）といた傾向をしめすが、語ごとのことなりもある。たとえば「串 2」は 2018 年調査が 42%、2019 年が 11%、「菊 1」は 2018 年 50%、2019 年 67% だった。2018-2019 の語ごとの無声化率の重相関 (R^2) は 0.75 とたかいが、おなじ語を日本語母語話者が発音した結果としてはこのていどは当然であろう。また、両年度の語ごとの無声化率で対応のある t 検定をおこなったところ、有意な差があるとまではいえない ($t(14) = 2.10; p = .053$)。図 14 の結果について上述したとおり、2018 年度の話者にたいして無声化率がたかい（あるいは、ひくい）とはいえないと判断される。

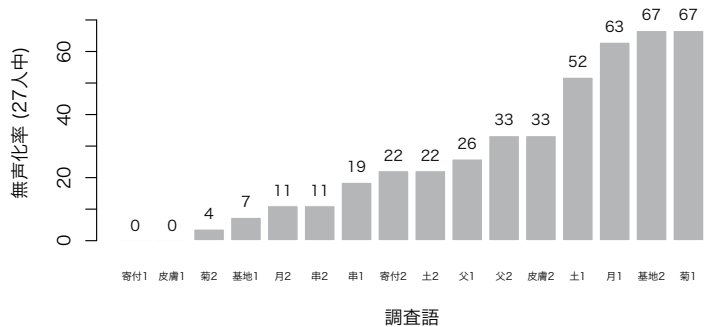


図 15 語ごとの母音無声化生起率（27 人中，単位は %）

さいごにアクセント型による効果をみる。アクセント（1型 / 0or2型）と拍（1拍目 / 2拍目）によって全データをわけた無声化率を図16に示す。2018年度の結果（吉田・他2019:183）とひじょうにちかく、あきらかなアクセントの効果がみられる（1拍目： $\chi^2_{(1)}=22.0, p<0.00001$ ；2拍目： $\chi^2_{(1)}=42.8, p\approx 0$ ）。アクセント型によりたかく発音される拍で無声化がおこりにくい、という効果は頑健なものだとかんがえられる。

以上をまとめると、昨年度より東の地域、かつ東三河の西端である蒲郡をふくむ話者をみたが、福森・池田（2004）の愛知県東部（現田原市）、静岡県西部（浜松市）、同県中部（藤枝市）の話者にくらべて相対的に無声化のすくない傾向の地域がつづいている、ということになる。さらに調査地域をひろげて、どこで「無声化がおおい」傾向に切り替わるか（切り替わらないか）をみきわめたい。（竹内・吉田）

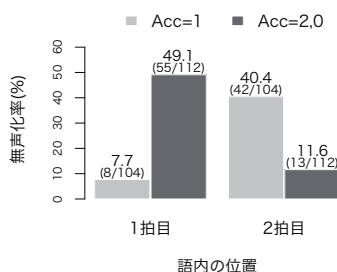


図16 アクセント型×拍ごとの母音無声化生起率。

（ ）の数字はケース数、上の数字は無声化率（％）。

9. まとめと課題

2018年度に開始した名古屋都市圏言語調査の2年目の本年度は、愛知県内の尾張地域と三河地域の比較を主眼に調査をおこない、いくつかの項目の分析をこころみた。今回の調査地のうち知立～蒲郡が行政上の区分としては三河になるが、知多半島の話者の一部に、「尾張・三河の中間」というような意識があることがうかがえた(5節)。ことばの使用とも関連があるようで、「つる／ずる」、「指令台／朝礼台」(6.1.1～2節)は、分布がおおよそ「犬山～清須」「東海～蒲郡」で二分され、知多地域が三河と共通、という地理的分布をしめす一方、「～やー」「～りん」の分布領域は（7.1節）は、おおよそ尾張／三河の区分に合致していた。

また、「くすぐったい」のコショ系（6.1.3 節）、「あざ」のアオジ（6.2.2 節）、「通学グループ」の「分団」（6.3.2 節）など、知多地域でとくに優位な項目もあった。「尾張」「三河」が言語分布領域として一定の実態性をもつこと、行政的には尾張に属する「知多」が、言語分布領域・意識の両面で、両者の中間的な性質をもつことがうかがわれる。また、LAJ で尾張から西三河に分布していた「くすぐったい」の後半部分ベッタイの衰退（6.2.2 節）も、「尾張」「三河」という言語分布領域が以前より明瞭になることにつながる（あるいはその結果）かもしれない。「肉」の意味」（6.2.1 節）「ドロボーケズリ」（6.2.3 節）「連れ」の意味」（6.3.1 節）、母音無声化（8 節）については、今回の調査地についてはめだった地域差がみられなかった。愛知県全体（あるいは岐阜南部もふくむ）が一定の等質性をもつ領域を構成している面もあるということをしめす。

大西（2017:3）は言語分布領域を形成する「共同体」にはさまざまな大きさ、構造のものと主張する。上にまとめたいくつかの地理的分布のパターンはこれを支持する。他方、「肉」の意味については、前年度の結果と総合することで、西に隣接する近畿地域からの「牛」の進出という変化がおきている蓋然性がたかくなった。吉田・南波（2019）による若年世代の全国方言分布データでも、「やん」の否定、「挽肉」のミンチの西から東への領域拡大が見出された。現在の名古屋都市圏という言語分布領域は、西に向かってあるていど開かれており、一部の言語形式をうけいれる状況もあることがうかがわれる。

以上の見通しがどのていどの有効性をもつか、継続的調査によって検証することが今後の重要な課題のひとつである。このためにも、調査でえられた結果を総合的に評価する方法を開発することもまた、今後の重要な課題となる。

謝辞 話者の紹介、日程調整、調査会場の利用などについて、以下の諸機関のみなさまにお世話をいただきました：清須市生涯学習課、知立市歴史民俗資料館、犬山市学校教育課、知多市生涯学習課・歴史民俗博物館、江南市生涯学習課、蒲郡市生涯学習課、幸田町生涯学習課、東海市社会教育課、阿久比町学校教育課・社会教育課、阿久比郷土学習同好会、半田市学校教育課。また、ご参加いただいた話者のみなさまにも篤く御礼もうしあげます。この研究は、愛知淑徳大学

の「学外教育等活動」予算による助成を受けています。

参考文献

- 井上史雄（1989）『言葉づかい新風景』東京：秋山書店
- 井上史雄（1992）「東海道沿線の方言分布パターン－グロットグラムデータの多変量解析－」『言語研究』101:35-63.
- 井上史雄・鎌水兼貴（2002）『辞典・新しい日本語』東京：東洋書林
- 江端義夫（1981）「方言敬語法体系の言語地理学的考察－愛知県地方域方言のばあい－」『国文学攷』（広島大学）90:19-32.
- 大西拓一郎（2017）「言語変化と方言分布－方言分布形成の理論と経年比較に基づく検証－」『空間と時間の中の方言－ことばの変化は方言地図にどうあらわれるか－』（大西拓一郎・編）東京：朝倉書店（pp.1-20）
- 大西拓一郎・編（2016）『新・日本言語地図－分布図で見渡す方言の世界－』東京：朝倉書店
- 岸江信介・清水勇吉・峪口有香子・塩川奈々美（2017）『近畿言語地図』徳島：徳島大学日本語学研究室
- 国立国語研究所・編（1966～1974）『日本言語地図第1～6集』東京：大蔵省印刷局
- 国立国語研究所（2018）「全国方言分布調査（FPJD）調査結果・新日本言語地図（NLJ）データ」http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html
- 篠崎晃一（1997）「気づかない方言 8 鉛筆の両端を削ること」『日本語学』16（10）:85-87.
- 福森貴弘・池田明大（2004）「青年層における東海地方方言話者の母音の無声化」『言語学論叢』23:41-61.
- 三井はるみ（1999）「新しい方言と古い方言の全国分布－語彙－」『日本語学』18（13）:88-96.
- 山田敏弘（2017）『岐阜県方言辞典』岐阜：岐阜大学
- 吉田健二・南波茉奈（2019）「Web 調査による若年世代方言の全国分布」『日本

語学会 2019 年秋季大会予稿集』 pp.89-96.

吉田健二・他（2016）「三重・愛知県境地域における方言の接触と変容」『愛知淑徳大学国語国文』 39:218-250.

吉田健二・他（2017）「三重・愛知・岐阜県境地域の言語使用と言語意識」『愛知淑徳大学国語国文』 40:207-242.

吉田健二・他（2018）「東海地域における方言使用と印象」『愛知淑徳大学国語国文』 41:167-198.

吉田健二・他（2019）「東海地域の言語実態調査（1）第一次計画と 2018 年度調査結果」『愛知淑徳大学国語国文』 42:176-208.